

ワークショップの趣旨

鈴木貴之（南山大学）

イメージング技術の発展などによって、神経科学は、近年急速な発展を遂げている。現在では、その研究対象は、知覚や運動といった比較的単純な心の働きから、高次の認知機能や感情、さらには道徳性や美といったものにまでおよんでいる。また、精神疾患の治療や四肢まひ患者のリハビリテーションなど、神経科学の実用面における利用可能性も拡大しつつある。

このように神経科学の社会における影響力が拡大するにつれて、さまざまな倫理的問題が生じつつある。たとえば、イメージング技術によって人の心を読むことは許されるかという問題や、神経科学の知見をマーケティングに利用することは許されるかという問題などである。また、神経科学の進展によって人間の行動を生み出すメカニズムが解明されれば、自由や責任といったわれわれの生活の中核をなす概念が、根本的な変容を被る可能性もある。神経科学をめぐるこれら多様な問題を論じる研究領域として提唱されているのが、神経倫理学である。

本ワークショップは、この新しい研究領域にかんする三つの発表からなる。まず、香川による発表では、神経倫理学の成立事情とその後の展開を概観し、それを通じて、神経倫理学は一つの研究領域として成り立ちうるのかという根本的な問題について考える。次の二つの発表は、神経倫理学のケーススタディである。植原による発表では、健康な人が知的能力を高めるために、精神疾患の治療に用いる薬物を用いることは許されるのかという問題について、哲学・倫理学の観点から考える。永岑による発表では、fMRIなどのイメージング技術を用いた嘘の探知にかんする研究の現状と問題点について、神経科学者の観点から考える。本ワークショップでは、これらの発表を手がかりとして、神経倫理学の意義や課題を明らかにしていきたい。